

輝いている人

原ゆうみ さん

総合科学部総合科学科

社会探究領域 現代社会システム

インタビュアー：犬田悠斗、黒木渉、小丸唯香、長野葵、野村・ミカエル・介

Q どうして総合科学部を選んだのですか？

最初に広島大学を目指した理由は、IDEC（国際協力研究科）に行きたかったからです。ただ、もう行くつもりはないのですが。そして国際協力には、多角的な視点が必要とされているので、多角的な考え方が身につく総合科学部にしました。

Q なぜ総合科学部の授業科目群で現代社会システムを選ばれたんですか？

私の目標はストリートチルドレンのシェルター（子どもたちを保護するところ）を作ること、一番その目標に合っているのが現代社会システムだったからです。現代社会システムでは、国際関係や貧困問題などを学んでいます。

Q 大学で貧困についてどのようなことを学んでいますか？

正直に言うと大学三年間勉強してきましたが、貧困について分かっていない部分が多いです。ただ、授業を通じて、あらゆる問題の根源には、貧困があるということに身にしみて感じました。なので、あらゆる問題の最初のアプローチとして、貧困を解決することが大切だと思います。

Q 国内ではなく、国際的な問題に関心を持ったのはどうしてですか。

国際情勢に関心があったのではなく、ストリートチルドレンに関心があったからです。例えば、教育環境や家庭環境など外からの影響により、自ら選択肢を得に行く機会を得られない場合、その子の未来の選択肢は狭まってしまうし、他の世界を知らないことになってしまう。なのでまず、大人ではなく子どもに焦点を当てました。そして子どもの中でも、衣食住が整っていない状態が一番問題であると考えたので、国際的な問題であるストリートチルドレンのことを考えたいと思いました。だけど、日本の貧困問題もかなり深刻なので、日本については私生活で関わっていかうかなと思っています。自分の住んでるコミュニティ内の子どもたちとか貧困家庭を見守れたらなと。

Q 総合科学部にきて良かったこと悪かったことはありますか？

総合科学部に来て、絶対に良かったと思っています。良かったことは、1、2年生で単位をとり終われば、3年生から自分のやりたい勉強が出来るなど、自分の活動に時間を割けることです。必修が少ないところもいいところです。あとは、色々な分野を勉強できるのは良いなと思います。ただ、スポーツと芸術活動を使ってシェルターを作ろうと思っていたのですが、その二つをしっかりと勉強できなかったのが残念でした。

Q 発展途上国でどのようなボランティアをしていますか？

広島大学に Smiles Production という団体があって、そこに一年の時から所属してボランティアをしていました。Smiles Production では、インドの貧困家庭の子どもたちの奨学金支援事業を行っています。奨学金は、主にインドの雑貨や紅茶を売って出た収益で賄っています。他には、学食のお盆に貼っている広告によって出た利益も奨学金に回しています。私はこの団体を一度お休みしたんですが、復帰後も温かく迎えてくれるステキな団体なんです。



Q ボランティアでは、どのようなときにやりがいを感じますか？

私は、あんまりやりがいは感じてないと思います。SDGs という国連が決めている、世界の問題を解決するための 17 個の目標があるのですが、それが解決されることで、私は初めてちゃんとやりがいを感じられるかなと思っています。

Q 総合科学部で学んだことが、ボランティアに活かされたことはありますか？

ストリートチルドレンや現地の人とコミュニケーションをとる時に、心理学で学んだことが役に立っているなど思ったことはあります。ただ、サークルで色々な活動をしてきた経験が、ボランティアをする上で一番大切だなと思っています。

Q ボランティアに関心を持ったきっかけは何ですか？

今関わっているストリートチルドレンのボランティアに興味を持ったきっかけは、中学生のときに使命感に駆られたからです。だから、原動力は、特別な熱い想いとかではなく、自分がやる必要があるなという思いです。でも結局、例えばバスケットが好きなのがバスケットが楽しいからしてるのと一緒に、私もそれに幸福感などのプラスの感情を感じるからやっているんだと思います。

Q ストリートチルドレンに興味を持ったのはどうしてですか？

ストリートチルドレンに興味を持ったのは、地元で、ダウン症の子どもや不登校の子ども、貧困に苦しむ子どもなどと一緒に過ごすような団体に入っていて、そこでの多様性に溢れた環境で暮らした経験が大きいです。色々な子どもたちと過ごしてきて、一番最初に何かしないとイケないのはどこだろうと考えたら、衣食住を整えることだなと思って、ストリートチルドレンというワードに繋がりました。

Q ストリートチルドレンの人たちとコミュニケーションする上で、何か大切にされていることはありますか？

ストリートチルドレンに会ったのが、インドとフィリピンに行った二回だけなので、コミュニケーション方法はまだ模索中です。ただ、Smiles Productionの先輩方や同期のアドバイスから、子どもたちにシェルターに来ると楽しいって思ってもらえることを意識することにしています。楽しかったら、何度もシェルターに来てもらえるので、一緒に遊ぶことが大切なのかと思います。



Q 留学は行かれましたか？

長期間行ったことはないですが1年生の時にSTARTプログラムでタイに行きました。去年は1カ月間フィリピンに行って、今年九月にインドに行きました。タイを選んだのは、貧困問題を扱っている JICA や JETRO に行けたからです。フィリピンは、NPO のインターンで行って、貧困村のコミュニティ開発に関わりました。インドは、留学ではなくてサークル活動で行きました。Smiles Production は、毎年インド派遣をしていて、奨学金支援をしている家庭や学校を訪問したり、協力している NGO に会いに行ったりしています。

Q 海外に行ってみて変化はありましたか。

カルチャーショックは受けなかったです。ただ、ストリートチルドレンとの関わり方ではすごくショックを受けました。ある活動でシェルターに文房具と服を持っていく機会がありました。持っていくものはシェルター側から提案された物を私たちでも相談して決めました。でも実際に持って行ってみると、子どもたちは服の柄や色の違いで喧嘩したり、鉛筆で人を刺したりしました。なので、持っていくなら本当に平等にしないとイケないし、持って行った物が他の用途で使われる危険性を考えないとイケないなと思いました。そして、何よりも「なぜ文具なども子どもたちに渡したのか」をしっかりと考えられていなかったんです。その時は、子どもたちとのよりよい関わり方が出来ていないなと感じて、とてもショックでした。

Q 将来の方向性は。

ストリートチルドレンのシェルターを作りたいだったので、NGO や NPO を創ろうと思っていました。ただ、NGO や NPO の課題として資金などの理由から継続的な運営が困難なことがあります。そこで、ソーシャルビジネスという考えに出会いました。ソーシャルビジネスというのは、社会問題を解決するビジネスモデルです。私はソーシャルビジネスの方が確実性が高いと思ったので、そのような会社に就職しようと思っています。



総科生に伝えたい5つのこと

総科生に伝えたいことは5つあります。

まずは、自分のやっていることに自信を持つこと。私の経験の話なのですが、例えばある人がファッションが好きで、ファッションデザイナーになりたいって思っている、はたまた、貧困問題を考えている人がいるとなると、ファッションという自分の好きなものを考えていることに引け目を感じる人がいるのだとか。でも私も「貧困解決」って言うけど、それは私のやりたいことで、やりたいことばかりやっていて。内容が違っただけでやってるモチベーション・動機の一部は一緒だと思うんです。総科に来る人は特に迷ってる人が多いと思うんだけど、自分でそこに熱意とかモチベーションを持って、しっかり自信を持って進めば別にいいと思います。私が話してたら、凄って言うてもらうことがあるんですが、別に凄くはない。仮に私が凄ければあなただって十分凄く！みんな凄くみんなそれぞれでよくて、みんなそのままでいいと思う。自分が思ったように生きてくれたらいいと思います（笑）

次は、失敗を恐れないこと。何事も何万回失敗してから成功するものだから、自分がこうの方がいいと思ったことに挑戦してきました。失敗しましたって時に反省して、次に挑戦すればいつか成功すると思うので、なるべく失敗をした方がいいと思う。私もたくさん失敗してきたし、まだ成功してない！だから、失敗を恐れるなというよりも、めっちゃ失敗しろ！かも（笑）

そして3つ目は、色んな人、色んな環境に関わること。私はコネクションがたくさんあることを結構自慢にしてて、あらゆる界隈の色んな人と繋がりがあります。特に最近、大人との繋がりが増えてる。自分はこんなペーペーだから何にもできないのは当たり前なので、基本的に言ったもん勝ちだと思っています。恥ずかしがらずに聞きまくって、質問しまくって、大口叩いて、色んな人と関わってます。色んな環境に飛び込んでみてます。そうしたら、コネクションが増えて、それが自分の強みになるし、その人たちが助けてくれるんです。

そして4つ目が、さっきも言ったけど、聞きまくること！私はあまり理解能力がなくて愚問をかなりするから、先輩に「ゆうみさんがいたらこんなことも聞いていいんだって思えます」ってよく言われる！それはすごく嬉しい。授業でも、こんなアホみたいなこと聞けないな、ではなくて何でも聞く。わからないことをわからないままにしとく方が怖いので聞く。たくさん聞く、たくさん喋る、メモをとる、ですね！メモは取った方がいいです。

最後は遊ぶこと！私はあんまり遊ばなかったけど、せっかくの大学やたくさん遊んだ方がいいと思う（笑）

インタビュー担当：上甲篤矢、滝石一太、長野葵

OB OG 紹介

プロフィール：

1985年総合科学部卒業生。編集制作会社就職後、小学館に入社。雑誌『小学二年生』『小学六年生』『Oggi』を担当された後、『Domani』の編集長、また『Precious』と『MEN's Precious』の創刊編集長を歴任。現在はプロデューサーと『和樂』編集長を兼任されている。

総合科学科
総合科学部

昭和
60
卒業

橋本
記一
さん

Q 今、小学館ではどのようなお仕事をされていますか？

今はプロデューサーと『和樂』の編集長を兼任しています。

Q 編集長というお仕事は具体的に・・・？

小学館は総合出版社なので雑誌によって編集長の仕事の仕方は随分違います。うちには『週刊ポスト』『女性セブン』という非常に大部数の週刊誌があります。『サライ』や『DIME』『BE-PAL』などの一般の雑誌、小学館の大きな特徴であるコミック雑誌、さらに単行本や図鑑、辞書の編集部もあります。それぞれ媒体によって編集長の仕事は大きく異なります。ただ、どんな雑誌であっても、単行本や図鑑、辞書であっても、編集長の一番の仕事はその世界観を決めるということです。私は創刊編集長を2誌経験しましたが、その場合は、ゼロから雑誌の世界観を決めなければなり

ませんでした。

『和樂』と『Domani』の編集長もしましたが、その場合は元々あった雑誌なので前任の編集長の時代にすでに世界観が作られていて、その世界観のままでもいいのか、今ある枠組みの中で変えた方がいいのか、すっかり変えた方がいいのかを考える必要がありました。前任の編集長たちが創った世界観を踏まえて新たな世界観を創る。これが何よりも大きな仕事です。じゃあ世界観を決めるって具体的に何かというと、台割という雑誌の設計図の作成がそれに当たります。雑誌全体の中で最初にどんな記事を持ってこようか、特集は何のテーマで何ページにしようか、連載はどんなものにしようか。このように台割を創ることで雑誌の世界観を確立していく。これが編集長の仕事です。

小学館

Q 小学館に入ったきっかけは？

特にはないですが、小学館入社前は編集制作会社で仕事をしていました。編集制作会社というのは出版社からの依頼で実際に雑誌の記事や書籍を制作する会社です。その会社では、集英社や旺文社等いくつかの出版社や毎日新聞などの新聞社の雑誌・書籍の編集を請け負っていました。そこともう一つ別の編集制作会社で雑誌づくりや書籍づくりの仕事を5年ほどしていましたので、出版の世界で仕事をしていきたいという思いはありました。1989年の秋にたまたま新聞で小学館の採用募集をみつけたんです。一度総合出版社の入社試験・面接に行くのも悪くないと考え、受けってみました。気が付いたら内定をもらっていて、運が良かったのだと思います。



Q 編集に向いている人ってどんな人ですか？編集のために必要な能力、基礎力はどんなことですか？

“編集者って何だろう”っていう議論は編集者の間で繰り返し行われます。写真は撮らない、イラストは描かない、スタイリストでもない。文章だって書かないことも多い。じゃあ何やっているかっていうと、そういう写真を撮る人、絵を描く人、文章を書く人達をまとめているだけなんです。そこで大切なのは、まず“こ

ういう雑誌（あるいは書籍）を創るんだ”という信念を明確にもつこと。同時に自分の作りたい世界観に対して柔軟性もないといけません。私たちのように利益を上げる商業雑誌においても、“こういうものを創るんだ”という信念を明確にもつことが一番重要だと思います。強い思いを持って作ることが大切です。

たぶん「何やったら良いですか？」ってつい先生に聞いたりする人は向いてないと思いますよ。一方で、自分がこれをつくりたいって言っても、それが独りよがりであっては誰も受け入れてくれないわけです。自分の創りたい世界観に対しての柔軟性が必要というのはそういう意味です。だから自分の思いを人と話し合いながら一つの世界を作っていける人が向いていると思います。第一に、確固たる信念があること。第二にそれをみんなと調整しながらやっていけること。それ以前の大前提として、人が好きであることが必要ですよ。全ての人はそれぞれ違った生き方をしている、それぞれに魅力があるわけですから、「そういう人たちに会って話を聞いてみたい。その人の良さを一つでも多く文章にしたい」という思いがあることも重要です。

もう一つ、私がたくさんの編集者をみていて重要だと思うのは“人に好かれる能力”です。気配りが出来て、困っている人をすぐ手助けしてあげられる、こういう人は人に好かれるだろうなと思います。一方で、それが出来なくて「何でこんなことにも気づかないんだ」と考えるような人が人に好かれないうと、そういう人でもないんです。その人にはその人のチャームみたいなものがあるって、どんな人が人に好かれるかなんて、結局理屈じゃわからない。とはいえ、人に愛されるチャームを持つことは編集者という仕事にはすごく重要です。「人はそれぞれで替えがきかない」と言われるように、自分だけのチャームを磨くしかないかなと思います。人はある年齢になると自分を変えるのがしんどくなる。そういう年齢になったら自分の良さを伸ば

していくしかないんです。ただ、今のみなさんはまだまだ自分を変えられる時期だと思います。「あの人なんだかチャーミングだな」と思った人がいたら、その人みたいになろうと努力してほしいなあと思います。周りのステキな人をたくさん見つけてください。



Q 出版社に勤めるとどういった生活スタイルになりますか？

これも人それぞれです。今は働き方改革の時代なのでよいことなのかどうか分かりませんが、24時間どこでも仕事のことを考えられる仕事であると思います。何がどこでどう転がっているかはわからない。私たち出版業とは全く違うものに触れている時でも、そこに新しい発想の可能性があるんだろうと思います。例えばファッションビルやファッションブランドを見ているときに、もしかすると一見関係ない日本美術や日本文化の切り口を思い浮かぶかもしれないわけ

です。そういうヒントが転がっているかもしれないと思うと、どんなところも仕事のネタになるはずですよ。それが仕事だと思ってしまったら労働時間になってしまいますし、働き方っていう意味ではあまり正しくはないかもしれない。でもそういったものも含めて楽しめる人が編集についての方が幸せでしょうね。

Q 編集のお仕事のやりがいや実際大変だったことは？

35年編集の仕事をしていると嫌でも人に会わなければいけないんですけれども（笑）やっぱり人は魅力的なんです。自分の思いもしない能力を持つ人や、自分が今まで知らなかった世界で活躍している人とも出会います。それが僕が編集の仕事をしていて一番良かったな、幸せだったなと思うところですね。今までいろいろな雑誌を担当してきましたが、雑誌によって会う人たちの分野が変わります。私の場合、ファッション雑誌を担当していた時は、ファッション業界の方やファッションデザイナー、写真家の方との付き合いが多かったのですが、『和楽』を担当するようになると日本美術や伝統芸能の人の付き合いに変わりました。それぞれの分野で一生懸命やっていらっしゃる方々の魅力っていうのはすごいです。雑誌を作ることである人との出会いがあること、それは人生においてとても刺激的なことだと思います。定年まであと丸3年なので、ここまで来たらちゃんと最後まで仕事を頑張りたいなと思います。

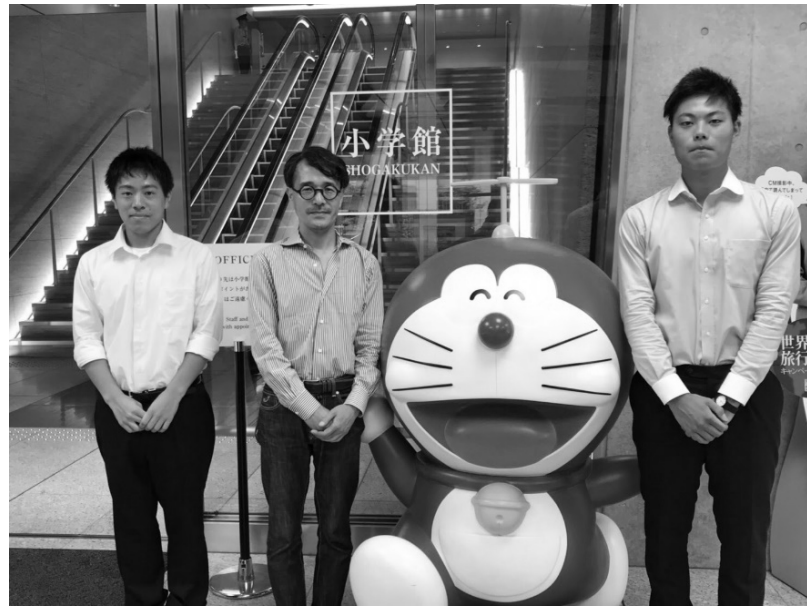


Q 総合科学部に入るきっかけは？

当時は社会で『学際研究』という発想が大きな話題を集めた時代で、学際的領域や学際研究というものに対してすごく興味がありました。また、一つの物を突き詰めて勉強する根気はまだなくて、いろいろなものを合わせて勉強できる総合科学部に進学することにしました。私も『飛翔』の制作に2年間携わりましたが、『飛翔』の取材をきっかけにして先生方に「学際ってなんだ」という質問をたくさんしました。どの先生方も、みなさん「総合科学部ってなんだ？学際研究ってなんだ？」ということ真剣に考えていらっしゃいました。もう亡くなりましたが、総合科学部誕生を強く主導され、初代学部長でもいらっしゃった今堀誠二先生はとても偉大な先生で、総合科学部を作った意義について端的に教えていただきました。非常に貴重なお話でした。みなさんも総合科学部を選んで入ったのでしょから、「自分たちのいる学部はなんだ？」ということ4年間考えてくれるといいなと思います。

Q 総科で学んだことが活かされた瞬間ってありましたか？

総合科学部が編集の仕事に向いているという人もすごく多いですが、どんな学部でどんな勉強をしていたかは編集の世界や出版の世界では関係ありません。自分が作りたいものが明確に持てるかどうか、自分本位にならずにみんなと話していけるか、人間に対する興味があって人と会うことが好きで、人と話をしたいという思いになれるかということが重要です。専門書の出版社というのは専門分野を深く掘り下げていく仕事なので、その分野の専門知識を持ってさらにその知識をアップデートしていくことが求められます。一方で、一般誌は難しいことや新たに出てきたキーワードを誰にでもわかるように編集していく仕事なんです。そう考えると、どんな話題が出てきてもいろいろな知識や情報を組み合わせて本を編む、あるいはそれをデジタル化するわけで、それは総合科学的なことかもしれません。



総科生へのメッセージ

社会にでてから、いろいろな人と「卒論のテーマは何？」という話をしました。その時「うちの大学卒論ないんです」というのを聞くとすごく残念な気持ちになりました。やっぱり卒論は大学4年間のゴールの一つであって、しかもそのために自分が4年間勉強してきたことを、自分自身で一からコーディネートするという楽しさが総合科学部の卒業論文にはある、ということに気付いてほしいと思います。他学部にはあまりないことじゃないですか。自分の道のを自分で編むという作業、それは人生の編集みたいなものです。卒論を書くというのは自分でする最初の編集の作業ですよ。大学4年間のどういう授業を組み合わせ、一つの卒論を書くかっていう壮大な編集作業です。総合科学部には研究分野も人間的個性も本当にいろいろな先生方がいらっしゃいます。これだけ多才な先生が多数いらっしゃる学部は日本中の大学でもそうはないと思います。皆さんはそんな素晴らしい学部にいるという幸運を自覚して、学生生活を上手く編集してほしいなと思います。

第3回総合科学部 OB・OG セミナー

7月5日に総合科学部 OB・OG セミナーが開催された。「広告・コミュニケーションで未来を創る」というテーマで中国四国博報堂 顧問 広島大学広報部長である畑尾武海さんをお招きし、数十人の総科生が参加した。広告業界に興味を抱く学生も多く、貴重な機会であった。



マスコミについての基本的な情報はもちろん、普段はなかなか聞けないような実際の仕事内容についても聞いた。その中でも特に、若い人の方がアイデアが出てくると思われがちだが経験豊富な人はそれだけ色々してきたため良いアイデアが出るということや、広告業界の仕事は一つのことをコツコツやるよりも色々なことに興味をもってマルチタスク、クリエイティブに、常に新しいことをしていくのが好きな人に向いているという内容が印象に残っている。また、学んだことや経験したことが直接役立つかは分からないが、自分が好きで学んだことが仕事に結びつく可能性もあると教えてもらった。

セミナー後のインタビューにおいて「総科でイベントをたくさんやっていたため結局そのような会社に入ってしまった。キャンプや大学祭、ソフトボール大会など、一年中あった。また、読書をたくさんした。」とおっしゃった。総科生へは、「本や新聞、雑誌、映画などのあらゆるメディアを読んで、観て、接触して吸収してほしい。」とメッセージをいただいた。また、「企画などでアイデアが浮かばない時は？」という質問に対しては、「みんなでワイワイやっていると触発されてアイデアが浮かぶ。イベントは一人で考えるものではないからそれぞれが持っているものを持ちあって話を膨らませていけば良いし、そこが面白いところ。」という意見をもらった。セミナー後の懇親会ではさらに詳しく仕事について教えてもらい、イメージとのギャップを感じたり新たな面白さを発見した。今回始めてセミナーを受けたが、これからは自分の興味に注目して具体的にどのような仕事をしてどのようなやりがいを感じられるのかなど、マスコミ関係の仕事を知っていきたいと感じた。

